

胎盤機能に新たな指標

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

《 77 》

妊娠後期に胎児機能不全や常位胎盤早期剝離などが起り、おなかの赤ちゃんや母体が危険な状態になることがある。その原因の一つとされる胎盤機能不全だが、これまで胎盤機能を評価する方法がなかった。県立中央病院総合周産期母子医療センターは胎盤の血流が乏しい部分に着目し、胎盤機能の新たな指標を考案。発症リスクを予測し、より安全なお産に役立てている。

同センター母性科科長の内田雄三医師によると、胎盤機能不全とは胎盤の機能が低下し、赤ちゃんに酸素や栄養が十分に送ることができない状態。緊急的に帝王切開を行うケースや赤ちゃんの命に関わることも少なくない。

「胎盤機能不全は胎児のさまざまな異常の原因とされる

内田 雄三
母性科科長

血流に着目しリスク予測

が、胎盤機能を評価する方法は確立していない」と内田医師。さらに診療に当たる中で、通常、妊娠週数を重ねると胎盤の血流が増えるのに対し、リスクを抱えた胎児の多くには胎盤の血流低下がみられることに気付いたという。

そこで2011年2月から、妊娠36週以降の妊婦を対

象に超音波検査で胎盤の血流が乏しい部分の体積を計測。胎盤全体との体積比を数値化し、胎盤機能を評価する方法を編み出した。

数値が高い妊婦の経過をみていくと、胎児の呼吸が苦しくなる胎児機能不全や羊水の減少、出産前に胎盤が剝がれてしまう常位胎盤早期剝離を発症するリスクが高いことが分かった。内田医師は「胎盤内血流のバランスを欠いた状態で分娩に至ることが、さまざまな異常の要因と考えられる」としている。

ただ血流が乏しい胎盤であっても、自然分娩で異常なく赤ちゃんが生まれるケースもある。「発症リスクがあっても安易に帝王切開を行うような過剰な医療をしてはいけない」と内田医師。「注意深く経過をみることで万が一のケースに備えたい。念頭にリスクを入れておくだけでも的確な判断につながる」と話している。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載します

血流の豊富な胎盤（写真左）と血流の乏しい胎盤の超音波画像。いずれも妊娠38週（県立中央病院提供）

